

# 富士山へ登り候



## 流山の富士塚は6メートル 這い登るが下山心配

山路を登りながら、こう考えた。  
これは漱石「草枕」の冒頭の一行、  
三十歳の主人公は考え事をしていて、  
角石の端を踏み損なう。

流山駅近くの浅間神社に、頂上まで  
わずか六メートルの富士山が屹立して  
いる。その山路を登りながら、漱石が  
踏み損なった角石を思ったが、ここは  
すべて胸突き八寸の急角度、立って登  
るのは難しいから這い登らざるを得な  
い。二合目、三合目という標石もある  
けれど、富士山から運んできたという  
埋め込まれた溶岩の間には木が生い茂  
り、登山道を塞ぐ勢いだから、踏み損  
なっても、社屋の裏までゴロゴロと転  
がり落ちることはないものの、降りる  
ときのほうが心配になってくる。降り  
それでも山頂に立ってはいない気分、マ  
ンションや隣家が迫っているけれど。

ロッコンショウジョウ！という  
気分にはなれないが、堅牢  
な築山技術には驚く。登山  
路が崩れることはなさそう

## 江戸時代に盛んな富士講の信仰



大正五年発行の『流山案内』に、浅間神社の祭神は木花開那姫命（このはなさくやひめ）で、「正保元年（一六四四）五月の創建なり」と口碑に伝ふ。平坦なる地に厳しく丘を築きしは明治二十四五年頃なり」とある。

頂上には「富士浅間大神」の石碑が立ち、裏に明治十九年、神武天皇紀元二五四六年とあるのだから、『流山案内』の編集者は、登山を敬遠したのか。また、平坦なる地という境内は二百五十八坪で、車の往来激しい通りに面して鳥居があるが、頂上に登って見下ろせば、山はぎりぎりの面積で築かれ、底辺からさらに何メートルか下がって「民有地」になっただけ。とても平坦地には思えない。

遠近に田を打つ人や初蛙という句が、『案内』に掲載されていた。平坦でのんびりした風景の中にも楽しい富士塚を想像するのも楽しい。江戸時代の頃から、富士山を信仰する人々が集まって富士講をつくり、白衣姿で六根清浄を唱えて登山し祈願した。その信仰はそれぞれ浅間神社に富士塚を築かせた。単なる盛土のところもあり、石祠や石碑と